

公 民 [倫 理] (100 点 50 分)

2004 年 7 月 6 日 (火) 1 限実施

千葉県立千葉東高等学校 第 3 学年 1,2,3,4,6,7,8,9 組対象

Produced by K.Kataoka

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。
 - 学年，組，名前を記入する。
 - 学年，組の該当個所をマークする。
 - 出席番号をマークする。(10 番以上は 10 の位と 1 の位の 2 カ所)
 - 男女の欄をマークする
 - 1.2.3 枚目のところはマークしない。
 - 停・欠・遅・早のところはマークしない。
 - 機械の読みとりミス確認のため、解答欄はマークの左側に番号を記入しておく。以上が正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 4 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

倫 理

(解答番号 [1] ~ [50])

第 1 問 次の文章を読み下の問い (問 1 ~ 問 1 5) に答えよ。(配点 30)

復活のイエスに出会い、その後、[A]の日に力を受けた弟子たちは、十字架につけられたイエスが復活して、人類の救い主となったことを大胆に述べ伝えた。その結果、多くのものが信者となり、最初の教会がエルサレムに誕生した。最初の教会の指導者たちは、みな、復活の証人たちであった。中でも教会の土台の岩とも呼ばれた [B]は、ユダヤ人に対する伝道者として活躍し、ローマにおいて殉教したと伝えられている。そして、キリスト教の教義の確立と異邦人への伝道の両面で大きな働きをしたのがユダヤ人 (a)パウロである。彼は、もともとユダヤ教のパリサイ派に属し、ユダヤ教徒によるキリスト教徒迫害の先頭に立っていた。しかし、その途中で劇的な回心を体験し、やがて一転してユダヤ人以外の諸国民に対するキリスト教伝道の先頭に立つことになった。初代教会は、ユダヤ教とローマ政府の双方から迫害されたが、ユダヤ教の会堂、個人の家、カタコンベ(地下墓所)などで集会を行い、その組織を整えていった。典礼の中心は聖餐の式で、これは (b)キリストの体と血をかたどったパンとブドウ酒を、参集した信者がともに食べるという秘儀であったから、信者以外は参加を許されなかった。

キリスト教は1世紀中葉から4世紀初頭まで断続的に国家の迫害にさらされた。303年、晩年のディオクレティアヌス帝が大迫害を開始した。それまでの迫害がおもに聖職者や信者個人に向けられていたのに対し、この大迫害は教会堂の破壊や聖典の焚書をとめない、物理的にキリスト教の撲滅をはかるものであったが、結果としては失敗した。この時代のキリスト教徒の勢力は、ある推計によると、人口の1割に達していたとされ、もはや撲滅できるものではなかった。313年、[C]大帝とリキニウス帝が出したミラノ勅令によって、キリスト教は帝国内の公認宗教の地位を得た。これをキリスト教の勝利とするのは早計に過ぎる。公認宗教となった教会は、没収財産を返還され、聖職者には租税負担免除の特権が与えられ、さらに信者間の争いに司教裁判権が認められた。こうした措置は教会が帝国の統治機構に組みこまれたことを意味する。

公認前後の教会はまだ教義を完成させていなかった。(c)四福音書の権威が確立したのは2世紀末で、新約聖書の正典が今日に伝わる形をとったのは4世紀のことである。もとより教義は聖典に立脚するが、聖書が教義の微妙な問題を規定しているわけではない。当時のキリスト教徒は信仰のあかしとして、自分が信じる教えを要約した 信条 を唱え、受洗の場合にもそれが必要であった。そして信条は地域と教会によってさまざまな形式と内容があった。ギリシア哲学の素養をつんだ知識人が改宗しだすと、当然、信条の内容を哲学的に解釈しようとした。そこで問題となったのが (d)三位一体論とキリスト論で、前者

に対する疑問はキリスト従属論として現れた。アリウスがその代表で、ニカエア公会議(325)はアリウスを異端としたが、この問題は4世紀の教会を計り知れぬ混乱に陥れ、最終的にはコンスタンティノーブル公会議(381)で三位一体論が確定した。

東方教会で形成された神学はアウグスティヌスによって西方のものに作り変えられた。アウグスティヌスは最初アンブロシウスとともに (e)キリスト教的プラトン主義の圏内にあったが、『[D]』にみるような救済の体験を通じて西方的伝統に立つ教会形成につとめ、ペラギウスとの論争に際してはパウロにもとづく信仰義認と恩恵の教えを明らかにして宗教改革に結ばれる線を生み、また (f)『神の国』では国家と教会の闘争および教会の最後の勝利を示して、歴史のなかでの教会の目標を明らかにした。この書の執筆直前の410年、ローマは西ゴート族の侵攻にあつて混乱に陥ったが、教会は消滅することなく続いて次の時代を準備した。

カトリック神学はすでに4世紀アウグスティヌスがその基礎を据えたが、(g)中世のスコラ学派によって完成される。「哲学は神学の婢」philosophia ancilla theologiaeはその基本精神をあらわす。「知らんがために信ずる」credo ut intelligamの語で知られる[E]、またボナベントウラ、ロンバルドゥスなどがスコラ神学を体系化した。これを完成したのは (h)トマス・アクィナスである。彼によってその権威を裏づけられた秘蹟(ひせき)sacramentumは、1439年の宗教会議で、「洗礼」「堅信」「聖体」「悔悛(かいしゅん)」「終油」「叙階」「婚姻」の七つに定められ、神の恩寵は、キリストの体としてのカトリック教会による秘蹟を通してのみ与えられるとされた。

問1 文中の空欄 [A]に入る最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。

[1]

主の昇天 過越の祭 聖霊降臨 主の公現

問2 文中の空欄 [B]に入る人名を、次の ~ のうちから一つ選べ。[2]

ヨハネ マタイ マルコ ペテロ

問3 文中の [C]に入る人名を次の ~ のうちから一つ選べ。[3]

コンスタンティヌス テオドシウス
マルクス・アウレリウス・アントニヌス ユリアヌス

問4 文中の [D]に入る著作名を次の ~ のうちから一つ選べ。[4](1997 センター本試験改題)

省察 告白 中論 弁名

問5 文中の [E]に入る人名を次の ~ のうちから一つ選べ。[5]

アンセルムス クザーヌス テルトゥリアヌス オリゲネス

問6 文中の下線部(a)に関して、パウロの思想についての説明として間違っているものを、次の ~ の中から一つ選べ。[6]

ユダヤ教徒ではない異邦人は、キリスト教の洗礼を受けるまえに、旧約の伝統に基づいて割礼を受ける必要がある。

人が救われるのは律法の命じるわざを行うことによってではなく、キリストを信じる信仰による。

たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ無に等しい。

わたしたちがまだ罪人だったとき、キリストが私たちのために死んで下さったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにした。

問7 文中の下線部(b)に関して、この儀式の由来となった出来事として最も適当なものを、次の ~ の中から一つ選べ。[7]

受胎告知 山上の説教 最後の晩餐 東方三博士の礼拝

問8 文中の下線部(c)に関して、新約聖書の正典化をうながす影響をキリスト教に与えた、ある宗教運動の説明として、最も適当なものを次の ~ の中から一つ選べ。[8]

啓示者より知識・認識が与えられることにより人間は覚醒し、魂は悪の支配する地上世界から解放されて神的な光明の国に上昇して神となる。

キリストは受肉前は神性と人性の両性を有するが、受肉後は唯一の本性しかもたず、人性は神性に吸収される。

世界は善神アフラ・マズダと悪神アーリマンの闘争の中にあり、人はいずれを選択するかによって最後の審判後の運命が決定する。

最後の審判の前に、キリストが再臨して地上に 1000 年続く王国を打ち立てる。このとき、殉教者や義(ただ)しいキリスト教徒は復活して、1000 年間の至福を味わう。

問9 文中の下線部(d)に関して、三位一体論の説明として、最も適当なものを次の ~ の中から一つ選べ。[9]

父なる神と子なるイエスと聖霊には一切の区別は存在せず、あらゆる意味において同一である。

父なる神の唯一絶対性を強調し、子なるイエスを「神の子」とよんでも、神に等しい永遠者とは認めず、神によって無からつくられた被造物であるとする。

父なる神と子なるイエスと聖霊は三つの位格をもつが、本質においては一つの実体として存在する。

キリストには神と人二つの人格ないし実体があり、「神の母(テオトコス)」というマリアの呼称は適当ではない。

問10 文中の下線部(e)に関して、新プラトン主義の思想の説明として、最も適当なものを次の ~ の中から一つ選べ。[10](2003年センター追試験改題)

事物は普遍的な理(ことわり=ロゴス)に基づいて生成し、人間はこの理に従うことで情念に支配されない、理想の生き方を実現することができる。

事物は神である「一者」を根源として、そこから流出によって派生的に生成したのであり、人間は実在界と感覚世界との中間に位置する。

事物は多様な仕方で生成するが、その根源には「空気」「水」といった構成元素が、本質において変わることのない原理として存在する。

事物は質料に内在する固有の形相が現実化していくことによって生成するが、この世界それ自体は生成も消滅もせず、永遠に存続する。

問11 文中の下線部(f)に関して、次の『神の国』の記述を読んで、その解釈として、最も適当なものを次の ~ の中から一つ選べ。[11]

こうして二種の愛が二つの国を基礎づけたのである。すなわち、神を侮るまでに高じた自己愛がこの世の国を基礎づけ、自己自身を侮るまでに進んでいる神への愛が天上の国を基礎づけたのである。要するに、前者は自己自身において誇り、後者は主において誇るのである。……こうしてこの世の国においては、人間にしたがって生きる賢者たちは、肉体の財産、自己の精神の財産を、あるいはそのいずれもの財産を得ようと努めてきた。……かれらは永遠に褒めるべき創造者のかわりに被造物を拝みこれに仕えたのである。他方、神の国においては人間の知恵は敬虔な信仰以外の何ものでもなく、それは人間を正しい仕方であらざる神の崇拜へと導く。そしてそこでは、聖徒たちとの共同体において、人間たちだけでなく天使たちも等しく“神がすべてのものにあつてすべてとなられる”ことを報いとして期待しているのである。

『神の国』第14巻28章より

神の国と地上の国の対立は、神への愛を重視するか隣人愛を重視するかの対立であり、神の愛を重視するものが神の国に招かれている。

神の国と地上の国の対立は、必ずしも単なる教会と世俗国家の対立ではなく、自らへりくだって受肉した神に心開く愛と、閉じられた自己愛との対立であった。

神の国と地上の国の対立は、最終的には和解されて、地上の国のすべての人間は神の招きに応じて永遠のいのちを与えられる。

神の国と地上の国の対立は、最後の審判の後におとずれる天国とローマ帝国の対立であり、ローマ帝国は地上の国として滅びる運命である。

問 1 2 文中の下線部(g)に関して、スコラ哲学の説明として間違っているものを、次の ~ の中から一つ選べ。[12]

中世の西ヨーロッパの修道院や教会付属の学校や大学などで研究，教授された哲学聖書と教父の著作，古代ギリシア・ローマの著作の文献的研究を重視する哲学
「信仰の理解」ということを目標として，信仰と理性の関わりを重視する哲学
古代ギリシア・ローマの古典文献読解を通して人間の生き方を考察する哲学

問 1 3 下線部(h)のトマス・アキナスに関する記述として最も適当なものを、次の ~ の中から一つ選べ。[13](2003 年センター本試験より)

信仰と理性の区別を体系的に論じて，信仰の優位のもとで両者の統合を試み，倫理思想に関しても自然的徳は神の恩恵によって完成されるとした。

信仰と理性は相互に分離された異質な領域に属しており，神にかかわる信仰的实践を哲学によって基礎づけることはできないとした。

一切は神から必然的に生じるものであり，倫理的問題に関しても，永遠の相のもとで事物を考察することによって判断されなければならないとした。

人間の救済と滅びは神によってあらかじめ決定されており，人間は合理的で正しい行為によってもその決定を変更することはできないとした。

問 1 4 キリスト教の三元徳の組み合わせとして適当なものを、次の ~ の中から一つ選べ。[14]

自由・平等・愛	信仰・自由・平等
信仰・平等・愛	信仰・希望・愛

問 1 5 14 世紀の神学者ウィリアム・オッカムの思想として最も適当なものを、次の ~ の中から一つ選べ。[15]

普遍は個別的对象を表示する名辞あるいは記号である。実在するものは個物のみであり，普遍は個物ではないから，いかなる意味でも実在しない。

類や種という普遍は，精神のなかに存在するのと同じ仕方で，精神の外にある対象のなかに実在する。

神は人間の知りうる現実以外のものをつくりうるとして，その限りで普遍が事物に先立ち神の知性のうちにある。

神は完全であり，存在を含まない完全はあり得ないため，神は存在する，ということをも人間の理性が証明しうる。

第2問 次の文章を読み下の問い(問1～問15)に答えよ。(配点 40)

殷代には帝(みかど)(上帝とも)とよばれる天の神を最高神として、各氏族の祖先神、山や川や草木その他種々の神を尊崇し、それらの神々を祀って幸いを祈り、また重要な行事は占いによって神意を確かめてから実行に移した。周代にも殷代の上帝信仰を受け継いで天が信仰された。そして周王室の天下統治も政治制度や身分秩序も[A]によって保証されるものと考え、天を祀ることは、この支配体制を確認する意味をももっていた。周の初めに周公が制定したと伝えられる[B]は、天および他の神々を祀る宗教儀礼であるとともに、天下統治のための政治形態や身分制度を規定する制度でもあった。

中国思想の本格的な展開は、春秋時代後期から戦国時代にかけての時期に始まる。諸子百家とよばれる数多くの学派・思想家が輩出した。そのうち主要な思想家群は、儒家、墨家、名家、道家、法家、陰陽家の六家であった。もっとも早く現れたのは(a)儒家で、孔子を祖とし、(b)孟子、(c)荀子らに受け継がれて発展し、有力な学派となった。儒家は伝統的な礼に立脚し、人倫の秩序と道徳を重んじ、それを実践できる人格(徳)を身につけることを目指し、そのために仁・義・礼・智などの徳目を説くとともに、その成果を政治の場に拡大して徳治(為政者の人徳によって民衆の教化を図る理想主義的な政治)を主張した。この「優れた人格の形成」とそれを基盤とする「徳治」の構想は修己治人の道とよばれ、以後長く儒家思想の基本をなした。墨子によって代表される(d)墨家は、儒家と同様に仁や義を説く一面もあったが、半面、儒家を批判し、兼愛交利、節用、非攻など、功利主義的な主張をした。

恵施・[16]などに代表される名家は、人の認識や言語の論理を分析し考察した。現在残っている名家の資料は「白馬非馬」*のような詭弁の命題が多いが、正当なものとしては「至大無外」「至小無内」などのように「絶対」あるいは「無限」の観念も自覚的に論ぜられた。道家の「無」の思想の成立は右の名家の論理に関する考察の成果と無関係ではなかったと思われる。老子と荘子の著作として伝わる『老子』『荘子』によって代表される道家の思想は、(e)人は無なる道に従って生きるべきだとして「無為自然」を説き、世俗の常識的・相対的な価値観にとらわれることなく、もろもろの執着を超越して絶対の境地に至ることが真に自己を全うする生き方であるとした。

[17]と韓非によって代表される法家は、儒家が重んずる自然発生的な不文律「礼」を時代後れのものとして否定し、時代の変化に適合した法(実定法)を制定・公布するとともに、信賞必罰主義によって、貴族・平民を問わずその法を厳格に守らせ、かつ民衆を農業生産と兵戦に精勤させようと、そのようにして富国強兵を図り、君主権の強化を目

* 白馬は白と馬の2概念であり、馬は1概念であるから、白馬は馬と同じではない、のごとく説いた。詭弁とみられているが、名・実の概念を論理的に追求したものと評価するむきもある

ざした。陰陽家は [18] に代表される，一種の自然哲学および歴史哲学をたてた人々で，陰陽と [C] の五行を原理として自然界・人間界の万般の事象の成立・変化の諸相を説明しようとした。以上の六家のほかに，農業生産の重視を [19] が説いた農家，合従連衡など外交上の策略を論ずる縦横家， [20] が兵法を論じた兵家などがあり，また複数の学派の思想をあわせ含んでいて特定の一家の思想とみられないものは雑家とよばれた。

宋学を大成したのは南宋の朱子で，北宋の哲学を継承し，とくに程頤の学説を多く取り入れてそれらを総合整理し，朱子学とよばれる独自の学説を打ち立てた。朱子の哲学理論は理と気とを基本にして構成された。気は物質の根源であり，理は事物のあり方を規定する存在の原理であった。理はまた「人はかく在るべし」という人間性の理想の典型であり，かつ「人はかく為すべし」という道徳的規範でもあった。朱子の本体論は，すべての事物は理と気とによって成立し存在すると説く理気二元論であったが，気よりも理を根源的な存在として優越させる「理の哲学」というべき立場をとった。人の性についても，「性即理」の命題をたてて 理によって性を説き 人の性は純粹に至善であるとする性善説をたてた。そして， [34]

王陽明に至って大成された陽明学は， [35]， [D] 重視かつ実践重視の哲学であった。

問1 文中の空欄 [16] ~ [20] に入る最も適当な人名を，次の ~ のうちから一つずつ選べ。 [16] [17] [18] [19] [20]

蘇 秦	周敦頤	商 鞅	公孫竜
鄒 衍	李卓吾	許 行	孫 子

問2 文中の [A] に入る最も適当なものを，次の ~ のうちから一つ選べ。 [21]

革 命	崇 祖	愛 人	天 命
-----	-----	-----	-----

問3 文中の [B] に入る最も適当なものを次の ~ のうちから一つ選べ。 [22]

五 経	易 筮	礼 楽	科 学
-----	-----	-----	-----

問4 文中の [C] に入る最も適当なものを次の ~ のうちから一つ選べ。 [23]

土・水・火・風・空	木・火・土・金・水
花・月・雪・星・宙	月・火・水・木・金

問5 文中の [D] に入る最も適当なものを次の ~ のうちから一つ選べ。 [24]

学	気	礼	心
---	---	---	---

問6 文中の下線部(a)に関して、『論語』の中の言葉として間違っているものを、次の～の中から一つ選べ。[25]

民の若きは則ち恒産なければ、因(よ)りて恒心なし。

未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん。

明日に道を聞かば、夕べに死すとも可なり。

学びて思わざれば即ち罔(くら)く、思いて学ばざれば即ち殆(あやう)し。

問7 文中の下線部(b)に関して、孟子は墨子の兼愛説を批判したが、儒教の「仁」と墨家の「兼愛」の相違を述べる文として最も適当なものを、次の～の中から一つ選べ。

[26](2004年センター本試験より)

儒教の仁は弱者に対するものであり、まず女性や子供に向かうが、墨家の兼愛はまず貧しいものに対するものであり、「憐れみ」と呼ぶべきである。

儒教の仁は惻隱の心に基づき、自他の区別を一切たてないが、墨家の兼愛は自分を捨て、他者のために利することを第一とする。

儒教の仁は「忍びざるの心」と言われ、見過ごしにはできないという単なる気持ちだけだが、墨家の兼愛は行動的な博愛主義である。

儒教の仁は近きより始まるもので、まず近親に対するものであるが、墨家の兼愛は無差別の愛であり、親疎の関係に基づくものではない。

問8 孟子の思想の説明として間違っているものを、次の～の中から一つ選べ。[27]

人間は生得的に、仁義を知り実践する能力として「良知良能」がそなわっている。

人民のためにならない君主に対しては、天命に逆らっても反逆の兵をあげてこれを伐つべきである。

「民を貴しとなし、君を軽しとなす」という観点から、「人に忍びざる政」としての王道政治が正しい政治である。

人間の善なる性は、四端の心を育てることによって、おのずから仁・義・礼・智の四徳としてそなわる。

問9 下線部(c)の荀子の思想の説明として最も適当なものを、次の～の中から一つ選べ。[28]

人間の悪を取り除くためには、無知を取り払い真理を認識することが必要である。

人間の悪を矯正するために、法によって統治することが必要である。

人間の悪は善の欠如にほかならず、祈り求めることで善を回復すべきである。

人間の悪なる本性は一種の「偽」によって礼を守り、善に導かなければならない。

問10 下線部(d)の墨家の儒家批判に関連して、次の『論語』と『墨子』からの引用文に書かれている、儒家と墨家の「義」・「利」の考え方の違いについての説明として、最も適切なものを下の ~ のうちから一つ選べ。[29]

君子は義に喩(さと)り、小人は利に喩る。[君子は正義に明るく、小人は利益に明るい]
(『論語』里仁篇)

「義政」とはどうあるべきか。大国は小国を攻めない、大氏族は小氏族を略奪しない、強者は弱者を脅さない、貴族は賤民を蔑視しない、ずるがしこいものは愚者を欺かない
このようであれば、必ず天を利し、鬼神*を利し、人を利することができる。三者ともに不利なところはないから、そこで天下に名声が広まり、聖王と仰がれるのである。
(『墨子』天子篇)

*鬼神：天地万物の靈魂。

儒家は利を利己的なものとしてとらえているが、墨家は天上天下全体の利としてとらえている。

儒家は利を個人的な利益としてとらえているが、墨家は集団を利用することとしてとらえている。

儒家は義を徳目としてとらえているが、墨家は義を偽善的なものとしてとらえている。

儒家は義を身分の高いものの徳としてとらえているが、墨家は弱者の徳としてとらえている。

問11 下線部(e)に関連して、道家思想における「道」に関する記述として最も適切なものを、下の ~ のうちから一つ選べ。[30](2004年センター追試より)

「道」は物事の道筋であり、個物や事象の有り様を決定づけるものであるが、それ自体としては言葉で表現することはできない。

「道」は事物の自然な姿のことであり、相対的で多様なものであって、言葉での表現を超越している。

「道」は絶対無差別な根源的世界の真理を意味し、無為自然を体得した人間にしか言葉で表現することはできない。

「道」は万物の根源であり、天地に先立って生じ、感覚では捉えられず、言葉では表現できないものである。

問12 『老子』(『老子道徳経』)の中の言葉でないものを、次の ~ のうちから一つ
選べ。[31]

その国を治めんと欲する者は、先ずその家を斉(ととの)う。

大道廃れて仁義あり。智慧出でて大偽あり。

光を和らげて塵に同ず。

上善は水のごとし。水は善く万物を利して争わず。

問13 『莊子』には次のような説話がみられる。この説話が示す道の性質を述べたもの
として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[32](1998 センター本試験)

南海の帝をシユクといい、北海の帝を忽(こつ)といい、中央の帝を混沌(こんとん)とい
った。シユクと忽とは時々混沌の土地で出会ったが、混沌はとても手厚く彼らをもてなした。
シユクと忽とはその混沌の恩に報いようとして相談し、「人間には誰にも(目と耳と口と鼻の)
七つの穴があって、それで見たり聞いたり食べたり息をししたりしているが、この混沌だけ
はそれがない。ためしにその穴をあけてあげよう」ということになった。そこで一日に一
ずつ穴をあけていったが、七日目に混沌は死んでしまった。

道(混沌)は、自分の世界にとらわれた人間(シユクと忽)の経験的判断を超えたもの
であり、彼らには認識することができない。

道(混沌)は、日常的な場で礼儀を重んじる人間(シユクと忽)によってこそ、その本
質が明らかになる。

道(混沌)とは、すべての人間がのっとるべき儒家規範であり、それに反する人間
(シユクと忽)には認識不可能なものである。

道(混沌)は、道に反する自己の功績や名声に執着しているような人間(シユクや忽)
にはとらえることができない。

問14 『莊子』に描かれる真人の性質を述べたものとして最も適当なものを、次の ~
のうちから一つ選べ。[33]

学識、人格ともにすぐれた、道徳的にりっぱな人物。

人間でありながら永遠の生命を獲得し、長生不死をとげる者。

品性いやしい人、欲ぶかく性根のひねくれたつまらぬ人物。

一切の欲望や分別から自由になり、天地自然と一体となる境地に生きる者。

問 1 5 文中の空欄の朱子の学説 [34] と王陽明の学説 [35] についての記述として、最も適切なものを、次の ~ の中から一つずつ選べ。

自己の心の良知に信頼し、良知の判断のとおりに行為せよという「致良知」の教えを究極とする

孝は万物を生成し秩序づける宇宙の根源であり、あらゆる人々に等しく内在する心情であるとし、その実践を何よりも重視するよう説いた

人はあらゆる事物の理を認識し、心を理に合致した状態に保ち、理に従って行動すべきであり、それが学問 (= 修養) であるとした

人間を含む天地万物を気による運動体と見なした上で、死物の条理である天理よりも、身近な日常の人倫を重視するよう説いた

第3問 次の文章を読み下の問い(問1～問13)に答えよ。(配点 30)

インダス文明の終末とほぼ同じころ、[A]人が西北インドに進入し、この文明の遺跡の近く、パンジャーブ(五河)地方に定着して、最古の聖典『[B]』を編纂した。その後、前500年ころまでにいわゆるバラモン教の根本聖典が整備された。この宗教は多神教であり、主として火神アグニなどの自然神や、武勇神インドラ(帝釈天)、司法神バルナ(水天)のような擬人化された神などが崇拜されている。しかし多神教の世界に満足しえなくなった人々は、やがて、多数の神々は唯一の神がさまざまな形をとって現れたものであり、その唯一の神の異なった名称にすぎないという思想を生み、さらに神々をも超越した唯一の最高神あるいは根本原理の追究に向かった。それは、後世インド思想の主流をなす一神教的あるいは一元論的思想の萌芽となった。

(a)『ウパニシャッド』では、祭式や最高神への関心は薄れ、知識が重視され、宇宙の根本原因として非人格的な一元的原理を追究するに至る。ウパニシャッドの哲人は、(b)梵我一如という説をとえ、後代のインド哲学の主要な性格を決定する業と輪廻の思想についても明確化した。

前500年ころ、社会的大変動を背景に、反バラモン教的な自由思想家(沙門)が輩出したが、なかでも[C]はジャイナ教を、ゴータマ・ブッダ(仏陀)は仏教を創始した。ジャイナ教は(c)四姓制度を認めず、不殺生を極端に強調し、苦行主義をとり、業を滅して解脱を求めるべきことを主張した。

仏教は形而上学的諸問題に関しては益なきこととして判断を中止し、(d)形而上学的実体であるアートマンを想定せず、(e)いっさいは苦であると認識して、その原因を妄執(渴愛)あるいは[D]にみいだし、それを断じて涅槃を実現すべきであるとして、(f)四諦・縁起説などの教えを説き、八正道すなわち[E]の実践を勧めた。

問1 文中の空欄[A]に入る語として最も適当なものを、次の～の中から一つ選べ。[36]

ドラヴィダ アーリア ドーリア インド

問2 文中の空欄[B]に入る語として適当なものを、次の～の中から選べ。[37]

ダンマパダ マヌ法典 リグ・ヴェーダ アヴェスター

問3 文中の下線部(a)の『ウパニシャッド』は日本語でどのような意味をもつか、適当なものを次の～の中から一つ選べ。[38]

賛歌 哲学 奥義書 法典

問4 文中の下線部(b)の梵我一如説について、その説明として間違っているものを、次の ~ の中から一つ選べ。[39]

梵と我が同一であることを悟ることにより、永遠に輪廻を繰り返すことができる。

アートマン（我）とは個人の本質であり、輪廻の主体である。

ブラフマン（梵）とは万物に偏在する、宇宙最高の原理のことである。

輪廻の原動力はカルマン（業）だが、梵我一如の真理により解脱が可能になる。

問5 文中の空欄 [C] に入る人名として適当なものを、次の ~ の中から一つ選べ。[40]

ウパーリ

ヴァルダマーナ

アングリマーラ

アーナンダ

問6 文中の下線部(c)の四姓制度に関連して、インドの身分制度の説明として適当でないものを、次の ~ の中から選べ。[41]

カーストとはポルトガル語で「家柄」「血統」を意味するカスタに由来する語であり、またジャーティとは地域社会の日常生活において独自の機能を果たしている、細分化された職能集団をあらわしている。

ヴェーダの人類起源神話によれば、神々がブルシャ(原人)の体を切り分けたとき、その口からバラモン、両腕からクシャトリヤ、両腿からバイシャ、両足からシュードラが生み出されたといわれている。

ヴァルナとはバラモン、クシャトリヤ、バイシャ、シュードラの4つの階級をあらわし、最下層の身分のシュードラは、他の身分の者が触れてはならない穢れた人間として社会生活のすべての面で差別されてきた。

カーストの職業はバラモンを最高位とする浄・不浄の観点から評価されるが、人がそれぞれの身分のなかに生まれることになったのは、前世の行為の結果であるから、そのカーストの職業に専念せねばならないと考えられている。

問7 文中の下線部(d)に関連して、それをあらわすゴータマ・ブッダの教説として最も適当なものを、次の ~ の中から選べ。[42]

一切皆苦

諸法無我

涅槃寂静

諸行無常

問8 文中の下線部(e)に関連して、苦悩のおこる原因についての仏教の考え方の説明として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[43](1999 センター本試験)

苦の原因は、自分でないものを自分と思うところにあるが、自分といわれるものは、自他の区別を可能にする原因や条件の背後にある根元的なものであると認識されなければならない。

苦の原因は、自分でないものを自分と思うところにあるが、我々の本質をなす自分といわれるものは、存在するともしないとも言えない不可知的なものであると認識されなければならない。

苦の原因は、自分が何であるか知らないという点にあるが、すべて存在するものは原因や条件に依存する相対的なものであり、自分といわれるものも変化する相対的なものであると認識されなければならない。

苦の原因は、自分が何であるか知らないという点にあるが、自分といわれるものの本質は、この世界のものを存在させる原因や条件の相対的あり方を超越したものであると認識されなければならない。

問9 文中の下線部(f)のゴータマ・ブッダが説いた「四諦」(四聖諦)のそれぞれについての説明として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[44](2003 センター本試験)

「苦諦」とは、苦を引き起こす原因として、無知、欲望、執着といったもろもろの心の煩悩があるという真理である。

「集諦」とは、理想の境地に至るためには、八正道の正しい修行法に集中すべきであるという真理である。

「滅諦」とは、煩悩を完全に滅することで、もはや苦が起きることのない平安の境地に達するという真理である。

「道諦」とは、あらゆる事物が存在し変化していくには、必ず依拠すべき道理があるという真理である。

問10 文中の空欄 [D] に入る苦しみの根本原因として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[45]

縁 起 感 情 無 明 因 縁

問11 文中の空欄 [E] に入る語として適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[46]

慈 悲 中 道 苦 行 布 施

問12 ゴータマ・シッダルタの生涯のエピソードとして伝えられ、信じられているものとして、間違っているものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[47]

カピラバストゥを支配していたシャーキャ族の王シュッドーダナとその妃マーヤーの子としてルンビニー園で生まれた。誕生後すぐに歩き、「天上天下唯我独尊」と語ったという。

生後7日に母と死に別れ、生活は恵まれていたものの内向しがちだった彼は、16歳で結婚し、のち男子をもうける。城の東・南・西・北の門から外出しようとして老人、病人、死人、出家者に遭遇し、人生の根源に潜む苦の問題に思いを深め、29歳で出家する。

ブッダガヤの菩提樹の下に座って、ひたすら断食などの苦行に打ち込み、ついに悟りを得て仏陀となった。最初の説法は初転法輪といわれ、鹿野苑でかつての修行仲間に対して行われた。

80歳のとき故国へ向かう旅立ちの途中、食中毒をおこして、クシナーラで2本のサーラの木の間に横たわって生涯を閉じた。遺体は荼毘に付され、遺骨は8つに分骨されてストゥーパ(仏舎利塔)にまつられた。

問13 慈悲に関する次の文章中の、[48]～[50]に入る語句を、次の ~ のうちからそれぞれ一つずつ選べ。(2004年センター本試験改題)

「慈悲」とは衆生に[48]を与える「慈」、衆生の[49]を取り除く「悲」から成る、生けるものすべてに向かった普遍的な心の在り方をあらわしている。[50]を目的とするといわれる上座部仏教に対して、大乘仏教では利他の心としてこの慈悲が強調される。そして、菩薩はこの慈悲の姿の理想であり、衆生の救済に努めるとされる。

自己の悟り 自他の解脱 厄 苦 楽 福

以 上